

子どもたちの「関係性を生きる力」尺度に関する研究

木村直子*, 畠中宗一**

(キーワード：関係性を生きる力、生きる力、小学生、中学生、高校生、自立)

1. はじめに

複雑化した現代社会の中で、子どもの貧困、不登校、虐待、援助交際、家庭内暴力、非行、心身症、自殺、いじめなど、子どもをめぐる問題が断続的に多発している。このような問題の渦中にある子どもたちは、気質的な問題を抱えていたり、特異的な環境に置かれていたりするなど特別な条件を必ずしも備えている子どもばかりではない。現代社会においては、どの子どもも問題を抱える可能性を持っているといえる。17年前に中学生の無気力傾向に関する研究を行った際¹⁾すでに、日常生活のさまざまな場面において意欲の減退を示す子どもの無気力傾向は、過去の精神医学における「スチューデント・アパシー」とは異なる、一般の学生・生徒の不適應の状態像として流布していることが危惧されていた(木村, 2002)。現在の子どもたちを取り巻く状況に目を向けると、社会環境が急激に変化し、家庭環境も多様化する中で、家庭・地域の教育力の低下や人間関係の希薄化、子どもの経験不足などがますます進み、規範意識や人間関係形成力・自己表現力の課題が指摘されている。子どもたちを取り巻く環境は、以前にも増して厳しいものとなり、楽観できない状況が続いているといえる。

今日の子どもや家族をめぐる問題群が断続的に多発している状況に対して、困っている・足りない環境条件を対処的に支援したり、全体として環境条件の底上げをするような対策を講じたりするこれまでの発想だけでは限界があると考えた。これまでの発想に加えて、主体である子ども自身に働きかけ、子ども自身が本来もっている潜在的な力をエンパワーする必要があると考える。そして、この主体である子どもに働きかける方法として、「関係性を生きる力」に着眼した。「関係性を生きる力」とは、社会や他者と繋がって生きていく力である。社会や他者と繋がり、集団の中で健やかに(well-being)暮らしていくためには、個としての能力を備え自立した人格を形成するだけでは不十分であり、他者との関係性が鍵になると考えた。

2017年2018年に改訂された新しい学習指導要領によって、「生きる力」の育成が理念的な目標として明確化された²⁾。子どもたちが将来、自分の知識や技能を生かしながら、自ら主体的に社会や世界と関わり、よりよい人生を送るため、自分の未来を切り開いていける力を育むことが重要であり、各学齢期における断片的な発達ではなく、人生における人間としての全人格的な成長を目指すことが教育の目標となった。この変革を鑑みても、「関係性を生きる力」は、子どもたちが未来に向かって健やかに育つために欠かせないものと考えられる。

2. 本稿の目的

本稿は、現代社会の中で子どもたちが健やかに育つためには、「関係性を生きる力」の回復が、キーワードの一つを構成するという仮説を探索する研究の第一歩として、子どもたちの「関係性を生きる力」の概念を具体化することを目的とする。

「関係性を生きる力」については、類似概念である既存の先行研究を土台に考えることとした。具体的には、基盤研究(B)「情緒的自立に関する総合的研究」(代表研究者・畠中：平成19年度－平成22年度)において、第1研究班(尺度開発)が大学生や大人を対象とした「関係性のなかでの自立」尺度の開発をしている(第2研究班：家族臨床、第3研究班：歴史、第4研究班：対人関係トレーニング)³⁾。この「関係性のなかでの自立」尺度を用いた応用研究からは、対人援助職である看護職において、メンタルヘルスを悪化させるリスクのある感情

*鳴門教育大学 子ども発達支援コース

**関西福祉科学大学 社会福祉学部

労働を多用している場面でも、「関係性のなかでの自立」得点が高群においては、メンタルヘルスが悪化しないことが証明されている。すなわち、「関係性のなかでの自立」がメンタルヘルスに対して緩衝効果を及ぼす、という知見が得られている⁴⁾。この知見は、大学生や大人を対象とした研究の成果であるが、現代社会の中で生きづらさを感じる子どもたちにも援用できるのではないかと考えた。つまり、他者との関係性をどのように生きるかが、子どもの健康を不安定化させるリスクのある環境下でも、子どもの健やかさを保つ緩衝効果として発揮すると考えた。

また本稿において「子どもたち」と表現したのは、本研究の対象は、人との関係性を生きる力を育む過程が重要となる10歳以降の子ども（小学校高学年から中学生、高校生など）を対象に考えている。したがって、10歳から18歳までの子どもを指す用語として、「子どもたち」を使用した。

3. 「関係性を生きる力」概念の明確化

社会福祉の原理ともいえる人間観の中に、「Person-in-situation」というものがある。直訳すると「人は、環境の中に存在する」であり、人間を周囲の環境とのバランスをとって生活している存在だと捉える人間観である。すなわち、人間は環境との相互作用の中に、自分を見出す存在であることを指す。人間の生活は、自分を取り巻く環境との相互作用によって成り立っている。例えば、物理的なことで考えると、春の季節の変わり目の時期には、半袖の上に長袖を着たり、長袖の袖を捲り、その日の気候の暑さ寒さに対応する。大人になると経験も増え、自分の体調と周囲の気候を折り合わせて、その日の服装を決めるようになる。それが環境との相互作用が上手く成立している状況である。もちろん環境の中には周囲の物理的な環境だけでなく、人的な環境も含まれる。人的な環境も併せて考えると、季節の変わり目で肌寒いけれど、周囲の人はまだ上着を着ていないので、自分もやめておこうかな、となる。このような人間観で捉えると、人間は周りの環境に不適応や過剰適応するのではなく、ほどよく適応することが重要であるといえる。不適応とは環境に馴染めず、ドロップアウトしたり環境に反発するような行動を取ったりすることである。過剰適応とは、一見すると適応しているように見えているが、自分の思いやあり方を失くしてまで、周囲に同調している状態である。周囲の環境に同化しすぎて、自分の意志や思いに鈍感になってしまい、自分が過剰適応していることにさえ気が付かない場合もある。適応するとは言葉で表現する以上に、実に困難なものである。ものごとは中庸の用であり、ほどほどがちょうどよい、まさにグッドイナフであることであることが求められる。

他者との関係性を生きることはまさに、社会や集団の中でほどよく適応し、社会の中で豊かに生きていく上で、欠かせないものだといえる。この概念を具体化したものが、2008年の木村らの「関係性のなかでの自立」尺度である。「関係性のなかでの自立」とは、対人関係を発達させる基盤であり、「対人関係において、他者に飲み込まれることなく、また自己に固執し閉じこもることもなく、人と人との相互作用のなかに関係性を存在させることのできる能力」、すなわち「自分と他人の境界（自他境界）が明確でありながら人と交わることのできる能力」と定義されている（木村ら、2008）。一般的に「自立」とは、「他の力によらず自分の力で身を立てること」を意味する（広辞苑）。こういった一般的な意味における「自立」の定義は、「職業的自立」「経済的自立」「身辺自立」のように個人内における自立を示している。それに対して、関係性のなかでの自立は、自分らしさの発達を必要条件とし、他者による「甘え」の受容を十分条件とし、関係性のなかで生きることができ、それでいて自己を見失うこともない状態を意味している（畠中、2007）⁵⁾。前述の通り、その後の大学生や大人を対象とした応用研究の中で、メンタルヘルスを悪化させるリスクのある環境下でも、「関係性のなかでの自立」が高い群では、メンタルヘルスを悪化させないことが証明されている。この応用研究の結果は、子どもにも援用できると考えた。ただし、2008年に作成された「関係性のなかでの自立」尺度は、社会や集団の中で対人関係を発達させるための基盤が形成されていることを得点化する尺度であり、その得点の高さは基盤形成の盤石さを示していた。自我形成の課題に取り組む過程の子どもたちにおいては、対人関係を発達させていくための自己における基盤も形成過程にあると考え、基盤を形成していることを表す「関係性のなかでの自立」ではなく、形成している過程にあることを示す「関係性を生きる力」とした。

本研究で用いる「関係性を生きる力」の定義は、大学生・大人版尺度の定義を踏まえ、対人関係を発達させる基盤として、「対人関係において、他者に飲み込まれることなく、また自己に固執し閉じこもることもなく、人と人との相互作用のなかに関係性を存在させることのできる力」、すなわち「自分と他人の境界（自他境界）が明確でありながら人と交わることのできる力」とした。

4. 方法

子どもたちの「関係性を生きる力」の概念の定義に基づき操作化するにあたり、2008年に作成した大学生・大人版の「関係性のなかでの自立」尺度の構成概念や項目を土台に、子ども版を作成することとした。方法としては、大学生・大人版の構成概念及び項目を、対象となる子ども版の年齢や発達段階に合った項目に変更し、仮説的に設定した。さらに仮説的に設定した項目を含む調査を実施し、IBM SPSS Statistics Ver. 22を使用して、統計的な妥当性や信頼性、概念の再現性を確認した。

(1) データの収集の手続きと調査対象者

本研究における調査対象者はA県内の公立小学校3校（全5・6年生）、公立中学校3校（全1・2年生）、公立高校3校（全1・2年生）に通う計2428名であった。調査実施にあたっては、思春期という多感な時期であることを考慮して、A県教育委員会に調査協力をあおぎ、学校の選定等に助言を頂いた。小学校及び中学校については地域性を考慮し、高校については学科等にも配慮し選定した。

調査実施の時期は、児童及び生徒の学校やクラスへの慣れの時期を考慮し、2018年9月から同年10月に行った。調査は自記式質問紙調査とし、学校における留置調査方法を採用し、個票が各学校で開示されないよう封入するなど細心の配慮を行った。調査配布数及び回収率は表1の通りである。事前に学校園に調査協力についてのご理解を頂いていたため、非常に高い回収率になっている。

表1 調査票回収率

	配布数	回収数	回収率(%)
小学校	286	275	96.1
中学校	611	575	94.1
高校	1531	1499	97.9
合計	2428	2349	96.7

(2) 調査における倫理的配慮

個人情報保護及び倫理的配慮については、調査は無記名とし、回答は任意であること、回答を拒否したり中断したりすることができること、回答を拒否したり中断したりしても一切の不利益は生じないことを紙面に明記し、調査校の先生方にもご理解頂き、実施した。調査の実施にあたっては、鳴門教育大学の研究倫理委員会の承認を得た⁶⁾。また調査内容の決定においても、倫理的配慮を行った。事前に鳴門教育大学倫理委員会による確認を経て、調査協力者が回答することによって大きな不利益が生じることはないと考えられる項目に限定した。調査に回答することにより精神的な苦痛を受けるリスクに対しては、回答したくない項目については回答を飛ばしたり、中断したりできることをしっかりと伝え、調査への回答は自由意志であることとした。

(3) 調査内容

調査内容については、すでに複数の調査研究において一定の信頼性と妥当性の担保された既存の尺度を土台に使用するため、「関係性を生きる力」子ども版の項目と、その他予備研究として必要な項目に限定して設定した。

①属性要因：学年・性別・きょうだい・家族構成など

②「関係性を生きる力」：木村直子、田辺昌吾ら（2008）の先行研究では、大学生（成人）を対象にした調査を行い、男女別多母集団同時分析による確証的因子分析や、既存の尺度との基準関連妥当性による検討の結果、一定水準の尺度要件を満たした尺度として完成させている。「関係性のなかでの自立」尺度は、「前向きに生きる」「自信をもって生きる」「ほどよい関係を生きる」「自分らしさを生きる」の4つの構成概念からなる18項目の尺度である⁷⁾。本調査における「関係性を生きる力」については、前述の通り、「関係性のなかでの自立」尺度の18項目の項目内容を踏まえて、10歳から18歳の子どもたちの発達や年齢を考慮した表現に変更した。

仮説的に設定した18項目は次の通りである（表2）。先行研究にならい、回答選択肢は6件法とし、教示文は、「以下の質問について、あなたの考えや思いに[非常によくあてはまる]場合は6を、[あてはまる]場合は5を、[ややあてはまる]場合は4を、[あまりあてはまらない]場合は3を、[あてはまらない]場合は2を、[全くあてはまらない]場合は1を選び、数字を○で囲んでお答えください。」とした。

表2 仮説的に設定した「関係性を生きる力」尺度の項目文

子ども版 (10歳～18歳)「関係性を生きる力」尺度	大学生・大人版「関係性のなかでの自立」尺度
1. 前向きに物事に取り組んでいる。	1. 前向きの姿勢で物事に取り組んでいる。
2. 人間関係が、めんどくさく思う。(逆転項目)	2. 人間関係を煩わしく思う。(逆転項目)
3. 人の目が気になり、自分の思うようにできないことがある。(逆転項目)	3. 人の目ばかり気にして、自分を失いそうになることがある。(逆転項目)
4. 人は他人と親しくなりすぎないほうが幸せであろう。(逆転項目)	4. 人は他人と親しくなりすぎないほうが幸せであろう。(逆転項目)
5. あまり人と親しい関係になりたいとは思わない。(逆転項目)	5. あまり人と親密な関係になりたいとは思わない。(逆転項目)
6. なにか良くないことがあると、すぐに自分のせいだと考えてしまう。(逆転項目)	6. なにか良くないことがあると、すぐに自分のせいだと考えてしまう。(逆転項目)
7. 自分の好きなことがはっきりしている。	7. 社会の中での自分の生きがいが増えてきた。
8. 私はいろいろな良い所をもっている。	8. いろいろな良い素質をもっている。
9. 友達とは、あまり深く付き合わないようになっている。(逆転項目)	9. 私の社会的なつながりは、うわべだけのものである。(逆転項目)
10. 人から無視されるのではないかと心配になることがある。	10. 人から見捨てられるのではないかと心配になることがある。(逆転項目)
11. 私は周りの人の意見に影響を受けやすい。(逆転項目)	11. 私は感情的に周りの人からの影響を受けやすい。(逆転項目)
12. 私は、自分なりの生き方を自分で選んでいる。	12. 私は、自分なりの生き方を主体的に選んでいる。
13. 他人との間に壁(かべ)を作っている。(逆転項目)	13. 他人との間に壁を作っている。(逆転項目)
14. だれも私をわかってくれないと、私は感じている。(逆転項目)	14. 誰も私をわかってくれないと、私は感じている。(逆転項目)
15. 周りの人の意見や環境によって、自分が変化してしまう。(逆転項目)	15. 周りの意見や環境によってすぐに影響され、変化してしまう。(逆転項目)
16. 失敗すると二度と立ち直れないような気がする。(逆転項目)	16. 失敗すると二度と立ち直れないような気がする。(逆転項目)
17. 自分のことが好きである。	17. 自分に対して肯定的である。
18. 元気で、やる気がある。	18. 張り合いがあり、やる気が出ている。

(4) 分析方法

調査データ収集後、SPSS for Windows 22.0 Jを用いて分析・検討した。分析・検討の流れは、以下の通りである。

第一に「関係性を生きる力」尺度の各項目の反応分布で正規性を確認した。第二にGP分析によって、各項目と全体尺度の関連性から項目の適切性を検討した。第三にIT分析によって、各項目が「関係性を生きる」を測定するのに妥当なものであるか確認した。第四に、探索的因子分析を行い、「関係性を生きる」がどのような因子構造にあるのか、その構造が理論的に妥当なものであるかを検討した。探索的因子分析の際には、調査対象者全体だけでなく、小学校高学年、中学校、高校、と学齢期ごとにも行い、因子構造の相違を把握することとした。あわせて、探索的因子分析における各因子の信頼性についても α 係数を算出し検討した。

5. 「関係性を生きる力」の構成概念とその妥当性

(1) 項目反応分布の正規性

設定した18項目の適切さを検討するため、各項目の回答分布に正規性があるかを確認した。その結果、いずれの項目においても、回答の正規性が保たれていることが明らかとなった。よって、「関係性を生きる」尺度として設定した18項目のうち、項目反応分布の正規性から、不適切さを指摘できるものはなかった。

(2) GP分析

次に、「関係性を生きる」尺度項目の決定のために、GP分析によって一つの項目の得点の動きが、全得点に関連しているかを確認した。一つの項目の得点の動きが、全得点の動きと連動しているのかということは、尺度項目としての要件の一つである。GP分析の方法は、はじめに全ての項目の合計得点を算出し、上位群と下位群を作成する。上位群と下位群別に各単一項目得点の平均値を算出して、t検定をおこない、両群間に統計的に有意な差があるかチェックした。有意な差がない場合は、全体の変動と当該項目の変動は関連していないことになり、尺度項目としては不適切であると判断することとしたが、「関係性を生きる」尺度として設定した18項目に関して、有意水準1%未満で、統計的に有意な差があることが示された。したがって、GP分析の結果、いずれの項目も適切であることが確認されたといえる。

(3) I-T 分析

次に、「関係性を生きる」尺度項目の決定のために、I-T 分析をおこなった。I-T 分析は、前節の GP 分析と同じように、一つの項目の得点の動きが、全得点の動きに関連しているかを確認することによって、尺度項目としての適切性をみることができる。I-T 分析と GP 分析は、分析の目的や前提は同じであるが、計算方法が異なる。したがって第 2 項の結果を確認する意味でも I-T 分析をおこなった。I-T 分析の方法は、項目全体得点(Total)と各単一項目(Item)との相関を求める。そして相関の基準によって項目を削除する。項目を削除する最も軽い基準は有意性であるが、ここでは四捨五入によって相関係数 0.4 以上とした。すなわち全体得点との相関係数が 0.4 以下の項目は、尺度項目として不適切であることが明らかとなる項目はなかった。

(4) 探索的因子分析と因子の信頼性

項目反応分布における正規性、GP 分析、I-T 分析によって適切と判断された全 18 項目を用いて、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析(EFA)を実施した。項目抽出の条件は、固有値 1 以上、因子負荷量 0.35 以上とし、複数の因子に高い負荷量を示さないこととした。

以下に、調査対象者全体で行った探索的因子分析①、高校のみを対象とした探索的因子分析②、中学校のみを対象とした探索的因子分析③、小学校高学年のみを対象とした探索的因子分析④の結果を示す。

①調査対象者全体で行った探索的因子分析

調査対象者全体で行った探索的因子分析では、主因子法プロマックス回転による因子分析の結果、3 つの因子が抽出され、累積寄与率は 47.910 であった(表 3)。

表 3 調査対象者全体で行った「関係性を生きる力」の探索的因子分析

	因子		
	1	2	3
問7-5.考えや思い—あまり人と親しい関係になりたいとは思わない	.909	.022	-.194
問7-9.考えや思い—友達とは、あまり深く付き合わないようになっている	.831	-.148	-.036
問7-4.考えや思い—人は他人と親しくなりすぎないほうが幸せであろう	.780	-.033	-.025
問7-13.考えや思い—他人との間に壁を作っている	.676	-.027	.132
問7-2.考えや思い—人間関係が、めんどくさく思う	.549	.088	.063
問7-14.考えや思い—だれも私をわかってくれないと、私は感じている	.535	.086	.225
問7-8.(逆転)考えや思い—私はいろいろな良い所をもっている	-.082	.852	.015
問7-17.(逆転)考えや思い—自分のことが好きである	-.086	.774	.072
問7-18.(逆転)考えや思い—元気で、やる気がある	.106	.721	-.023
問7-1.(逆転)考えや思い—前向きに物事に取り組んでいる	.140	.587	-.076
問7-7.(逆転)考えや思い—自分の好きなことがはっきりしている	-.027	.558	-.130
問7-12.(逆転)考えや思い—私は、自分なりの生き方を自分で選んでいる	-.092	.522	.047
問7-11.考えや思い—私は周りの人の意見に影響を受けやすい	-.204	-.120	.796
問7-15.考えや思い—周りの人の意見や環境によって、自分が変化してしまう	.003	-.014	.668
問7-10.考えや思い—人から無視されるのではないかと心配になることがある	.128	-.092	.658
問7-3.考えや思い—人の目が気になり、自分の思うようにできないことがある	.060	.066	.597
問7-6.考えや思い—なにか良くないことがあるとすぐに自分のせいだと考えてしまう	.008	.059	.539
問7-16.考えや思い—失敗すると二度と立ち直れないような気がする	.209	.161	.401

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

②高校のみを対象とした探索的因子分析

高校のみを対象とした探索的因子分析では、主因子法プロマックス回転による因子分析の結果、3 つの因子が抽出され、累積寄与率は 56.825 であった(表 4)。

表4 高校のみを対象とした「関係性を生きる力」の探索的因子分析

	成分		
	1	2	3
問7-5.考えや思い—あまり人と親しい関係になりたいとは思わない	.914	-.180	.031
問7-9.考えや思い—友達とは、あまり深く付き合わないようになっている	.877	-.073	-.145
問7-4.考えや思い—人は他人と親しくなりすぎないほうが幸せであろう	.839	-.042	-.027
問7-13.考えや思い—他人との間に壁を作っている	.718	.160	-.036
問7-2.考えや思い—人間関係が、めんどくさく思う	.631	.056	.051
問7-14.考えや思い—だれも私をわかってくれないと、私は感じている	.593	.267	.014
問7-11.考えや思い—私は周りの人の意見に影響を受けやすい	-.248	.886	-.123
問7-15.考えや思い—周りの人の意見や環境によって、自分が変化してしまう	-.084	.804	-.020
問7-10.考えや思い—人から無視されるのではないかと心配になることがある	.157	.714	-.080
問7-3.考えや思い—人の目が気になり、自分の思うようにできないことがある	.111	.644	.083
問7-6.考えや思い—なにか良くないことがあるとすぐに自分のせいだと考えてしまう	.084	.591	.067
問7-16.考えや思い—失敗すると二度と立ち直れないような気がする	.196	.528	.146
問7-8.(逆転)考えや思い—私はいろいろな良い所をもっている	-.025	-.008	.847
問7-17.(逆転)考えや思い—自分のことが好きである	-.022	.089	.774
問7-18.(逆転)考えや思い—元気で、やる気がある	.170	-.025	.729
問7-7.(逆転)考えや思い—自分の好きなことがはっきりしている	-.123	-.139	.685
問7-1.(逆転)考えや思い—前向きに物事に取り組んでいる	.138	-.080	.664
問7-12.(逆転)考えや思い—私は、自分なりの生き方を自分で選んでいる	-.224	.138	.627

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

③中学校のみを対象とした探索的因子分析

中学校のみを対象とした探索的因子分析では、主因子法プロマックス回転による因子分析の結果、3つの因子が抽出され、累積寄与率は54.86であった(表5)。

表5 中学校のみを対象とした「関係性を生きる力」の探索的因子分析

	成分		
	1	2	3
問7-5.考えや思い—あまり人と親しい関係になりたいとは思わない	.863	.045	-.148
問7-9.考えや思い—友達とは、あまり深く付き合わないようになっている	.851	-.234	.020
問7-4.考えや思い—人は他人と親しくなりすぎないほうが幸せであろう	.776	-.054	-.023
問7-13.考えや思い—他人との間に壁を作っている	.736	-.071	.067
問7-2.考えや思い—人間関係が、めんどくさく思う	.630	.138	-.029
問7-14.考えや思い—だれも私をわかってくれないと、私は感じている	.613	.180	.117
問7-17.(逆転)考えや思い—自分のことが好きである	-.069	.844	.038
問7-8.(逆転)考えや思い—私はいろいろな良い所をもっている	-.049	.842	.084
問7-18.(逆転)考えや思い—元気で、やる気がある	.121	.781	-.032
問7-1.(逆転)考えや思い—前向きに物事に取り組んでいる	.108	.675	-.091
問7-7.(逆転)考えや思い—自分の好きなことがはっきりしている	-.099	.645	-.102
問7-12.(逆転)考えや思い—私は、自分なりの生き方を自分で選んでいる	-.089	.601	.032
問7-11.考えや思い—私は周りの人の意見に影響を受けやすい	-.177	-.164	.869
問7-10.考えや思い—人から無視されるのではないかと心配になることがある	.097	-.062	.729
問7-6.考えや思い—なにか良くないことがあるとすぐに自分のせいだと考えてしまう	-.114	.143	.678
問7-3.考えや思い—人の目が気になり、自分の思うようにできないことがある	.042	.098	.677
問7-15.考えや思い—周りの人の意見や環境によって、自分が変化してしまう	.156	-.083	.670
問7-16.考えや思い—失敗すると二度と立ち直れないような気がする	.247	.217	.356

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

④小学校高学年のみを対象とした探索的因子分析

小学校高学年のみを対象とした探索的因子分析では、主因子法プロマックス回転による因子分析の結果、3つの因子が抽出され、累積寄与率は48.137%であった(表6)。

表6 小学校高学年のみを対象とした「関係性を生きる力」の探索的因子分析

	因子		
	1	2	3
問7-5.考えや思い—あまり人と親しい関係になりたいとは思わない	.913	-.033	-.169
問7-4.考えや思い—人は他人と親しくなりすぎないほうが幸せであろう	.840	-.116	.052
問7-9.考えや思い—友達とは、あまり深く付き合わないようになっている	.762	.019	-.071
問7-13.考えや思い—他人との間に壁を作っている	.682	.108	.054
問7-2.考えや思い—人間関係が、めんどくさく思う	.562	.046	.133
問7-14.考えや思い—だれも私をわかってくれないと、私は感じている	.463	.220	.254
問7-16.考えや思い—失敗すると二度と立ち直れないような気がする	.409	.101	.255
問7-18.(逆転)考えや思い—元気で、やる気がある	-.062	.806	.026
問7-8.(逆転)考えや思い—私はいろいろな良い所をもっている	-.069	.790	.138
問7-17.(逆転)考えや思い—自分のことが好きである	-.123	.679	.179
問7-7.(逆転)考えや思い—自分の好きなことがはっきりしている	.202	.593	-.327
問7-12.(逆転)考えや思い—私は、自分なりの生き方を自分で選んでいる	.086	.549	-.121
問7-1.(逆転)考えや思い—前向きに物事に取り組んでいる	.326	.469	-.075
問7-11.考えや思い—私は周りの人の意見に影響を受けやすい	-.215	.006	.677
問7-6.考えや思い—なにか良くないことがあるとすぐに自分のせいだと考えてしまう	.065	-.126	.607
問7-3.考えや思い—人の目が気になり、自分の思うようにできないことがある	.062	-.016	.577
問7-15.考えや思い—周りの人の意見や環境によって、自分が変化してしまう	-.003	.138	.494
問7-10.考えや思い—人から無視されるのではないかと心配になることがある	.289	-.115	.476

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

①～④の探索的因子分析の結果、小学校高学年、中学校、高校のいずれも、ほぼ同様の因子が抽出されていることが分かる。中学校と小学校高学年は因子の抽出順が同じであり、1項目を除き、各因子内の項目も同じであった。さらに、中学校と高校では全く同じ項目が各因子を構成しており、因子の抽出順が第2因子と第3因子が反対となっている。累積寄与率に着目すると、中学校、高校それぞれの探索的因子分析では説明率が50%を超えているのに対し、小学校では50%を下回っている。この小学校の結果が全体の対象者の探索的因子分析における累積寄与率の低下を引き起こしていると考えられる。

この結果から、以下の二つのことが考察される。第一に「関係性を生きる力」は、3つの下位概念から構成される1つの概念として捉えることができる。第二に「関係性を生きる力」の概念は、小学校高学年を対象に測定するにはやや不安定であり、適用は中学校以降が安定した結果が得られる。

さらに抽出された3つの因子について、先行研究の大学生・大人版の因子構造と比較すると、大学生・大人版の「前向きに生きる」「自信をもって生きる」「ほどよい関係を生きる」「自分らしさを生きる」の4因子構造だった因子のうち、「前向きに生きる」「ほどよい関係を生きる」の因子は、項目もそのままの同一の因子として出現し、さらに「自信をもって生きる」「自分らしさを生きる」が合体した因子が第3の因子として出現した。これは、非常に興味深い結果である。大学生・大人版の因子構造について木村・田辺ら(2008)は、『「自分らしさを生きる」は、「自信をもって生きる」の他者や外界の価値観やあり方に過剰適応しようとする態度とも重なる』ことを指摘し、内容的分離の困難さを示唆している。つまり、子ども版において3因子構造となったことは、むしろ妥当な結果だと解釈できる。

これらの内容を踏まえ、各因子を以下のように命名した。「関係性を生きる力」の第1因子は、自己閉鎖性、親密性孤立・親密な他者の存在、他者軽視の項目が含まれており、個々人のこれまでの経験を踏まえた上で、他者や外界との本来的交流が積極的に必要であると考えている内容から、「ほどよい人間関係を生きる」と命名した。このことは、「関係性を生きる力」において、社会の中で生きていくために、他者や外界との交流の必要性を積極的に認めていることの大切さを示唆している。第2因子は、自己実現的態度、自尊感情の項目が含まれ、積極的な意味での自己肯定感を持っている内容から、「前向きに生きる」と命名した。このことは、「関係性を生きる力」において、現状の自己を積極的に肯定し、前向きに生きていることの必要性を示唆している。第3因子

は、自他境界、自己の確立、基本的信頼感、自我同一性の項目が含まれ、他者や外界と交流する中で、他者や外界からの影響によって、自己のあり方を変化させてしまわない内容から、「自分らしく自信をもって生きる」と命名した。このことは、「関係性を生きる力」において、他者や外界に合わせることに神経を使い不安を抱いたり、他者や外界の価値観やあり方に過剰適応しようとするのではなく、他者や外界の中で基本的な安全保障感を保ちながら、他者や外界の意見や環境に揺さぶられない自分らしさを保ち他者と交流することの必要性を示唆している。

(5) 因子の信頼性

探索的因子分析によって抽出された3因子の尺度としての信頼性を確認するため、信頼性分析をおこなった。その結果、「関係性を生きる力」全体尺度としても、また下位因子による下位尺度としても、尺度要件である $\alpha=0.7$ を十分満たしており、一定の信頼性をもった尺度であるといえる（表7）。

表7 「関係性のなかでの自立」尺度中学生版・下位尺度の信頼性

	関係性を生きる力 全体尺度	ほどよい 人間関係を生きる	前向きに生きる	自分らしく 自信をもって生きる
小学校	$\alpha=0.892$	$\alpha=0.875$	$\alpha=0.825$	$\alpha=0.730$
中学校	$\alpha=0.873$	$\alpha=0.843$	$\alpha=0.818$	$\alpha=0.781$
高等学校	$\alpha=0.873$	$\alpha=0.863$	$\alpha=0.811$	$\alpha=0.812$
全体	$\alpha=0.879$	$\alpha=0.864$	$\alpha=0.817$	$\alpha=0.793$

6. まとめ

「関係性を生きる力」尺度子ども版は、「ほどよい人間関係を生きる」「前向きに生きる」「自分らしく自信をもって生きる」の3つの構成概念から成り立つ18項目の一定水準の信頼性のある尺度であると判断できる。なお尺度は小学校高学年より回答できるが、安定した回答が得られるのは中学生以降と考える。成人・大学生版の概念構造が同様になったという結果は、対人関係を発達させる基盤が、10歳頃から大人に至るまで一定の普遍性をもった本質的概念であることの証左と考えられる。

「関係性を生きる力」尺度（18項目）

ほどよい人間関係を生きる

- ・あまり人と親しい関係になりたいとは思わない（逆）
- ・人は他人と親しくなりすぎないほうが幸せであろう（逆）
- ・友達とは、あまり深く付き合わないようになっている（逆）
- ・他人との間に壁を作っている（逆）
- ・人間関係が、めんどくさく思う（逆）
- ・だれも私をわかってくれないと、私は感じている（逆）

前向きに生きる

- ・元気で、やる気がある
- ・私はいろいろな良い所もっている
- ・自分のことが好きである
- ・自分の好きなことがはっきりしている
- ・私は、自分なりの生き方を自分で選んでいる
- ・前向きに物事に取り組んでいる

自分らしく自信をもって生きる

- ・私は周りの人の意見に影響を受けやすい（逆）
- ・なにか良くないことがあるとすぐに自分のせいだと考えてしまう（逆）
- ・人の目が気になり、自分の思うようにできないことがある（逆）
- ・周りの人の意見や環境によって、自分が変化してしまう（逆）
- ・人から無視されるのではないかと心配になることがある（逆）
- ・失敗すると二度と立ち直れないような気がする（逆）

7. 今後の展開

今後の研究の展開としては、「関係性を生きる力」尺度を変数として使用し、リスク要因となる環境要因下における子どもの健康への緩衝効果について調査研究を進めていく予定である。もちろん、この仮説が実証されたとしても、この知見をどのような条件のもとで具体化するかが大きな課題である。関係性を生きるということは、頭で理解するというよりも、日常生活において多様な経験を積み重ねながら、習得していく必要がある。折しも、2017年2018年に改訂された新しい学習指導要領では、「生きる力」を育むことが理念的な目標として明確化し、これまでとは異なる主体的な学びとしての「アクティブ・ラーニング」が提案されていることから、今回の「関係性を生きる力」の概念をベースとした中高生向けの対人関係に関するアクティブラーニング型のプログラムを開発することによって、体得できる可能性も考えられる。第4次産業革命の時代を見据え、予測不能な変化に対応し柔軟に対応できる力を育むためにも、他者や社会と関わり、子どもたちが主体的に生きる力を身に付け発揮することが求められている。

付記

本論文は、「基盤研究（C）（一般）（H29～H32）中学生の「関係性をいきる力」を回復するプログラム開発のための基礎的研究」（研究代表：畠中宗一）の成果の一部である。

謝辞

本論文で使用したデータは、A県教育委員会生涯学習課の先生方の協力を得て、A県内の公立の小学校、中学校、高校の先生方、児童及び生徒の皆さまに調査に協力して頂きました。学校現場における調査実施の受け入れが難しい時代に、ご協力頂いたことに心より感謝申し上げます。

注) 引用文献

- 1) 木村直子, 中学生の無気力とこれを規定する諸要因に関する研究, 日本社会病理学会『現代の社会病理』, (17), 2002, 63-75
- 2) 新しい学習指導要領等を目指す姿
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm
(アクセス確認: 2019年11月26日)
- 3) 木村直子, 田辺昌吾, 野原留美ほか, 「関係性のなかでの自立」尺度作成に関する研究, 日本精神保健社会学会機関誌『メンタルヘルスの社会学』, Vol. 14., 2008, 19-31
- 4) 野原留美, 畠中宗一, 「対人援助職(看護職)のメンタルヘルスと関係性のなかでの自立との関連性に関する研究」『メンタルヘルスの社会学』 Vol. 15., 2009, 同「関係性のなかでの自立を促す支援に関する研究: 対人援助職(看護職)を対象としたIPRトレーニングの有効性」『メンタルヘルスの社会学』 Vol. 16. 2010
- 5) 畠中宗一, 「情緒的自立の社会学」, 世界思想社, 2007, 189: 45-57
- 6) 鳴門教育大学の研究倫理委員会の承認を得た。
- 7) 「関係性のなかでの自立」尺度は合成尺度である。複数の尺度を元にした合成尺度については、学術分野によって賛否があるところではあるが、一定の手続きを踏み、一つの尺度として作成されている。詳細については、3)の文献に記述している。

Developing the ability to maintain inter-personal relationships — A scale for youth —

KIMURA Naoko* and HATANAKA Munekazu**

The purpose of this research was to construct a scale to assess the ability of the individual to maintain inter-personal relationships, and to examine the reliability and validity of that scale.

In this connection, we conducted a questionnaire survey (including a scale of) targeting 2,428 youth students in nine schools.

We also implemented a factor analysis of 18 preliminary factors determining the ability to maintain inter-personal relation scale items using the Principal Factor Promax Rotation, which enabled us to derive three factors. We then conducted a confirmatory factor analysis, to assess the performance of the scale comprised of three factors for a total of 18 items encompassing the following 1) Having a positive way of thinking”; 2) Maintaining sufficiently good relationships”; and 3) Living life with confidence.”.

We concluded that we were able to develop a scale to assess ability to maintain inter-personal relationships, confirming the reliability and validity. of this scale. We believe that this scale will be useful in clinical scenarios and research activities.

*Department of Early Childhood and Special Needs Education, Naruto University of Education

**Department of Social Welfare, Kansai University of Welfare Sciences